

第6学年 図画工作科 学習指導案

天理市立福住小学校 村田 豊

1. 単元名 「焼き物を作ってみんなで摘んだ新茶を楽しもう」

2. 単元の目標

- 手びねりや玉づくりなどの特徴を生かし、焼き物を工夫してつくることができる。【知識・技能】
- 手びねりや玉づくりの特徴を生かし、楽しく使える物やその形を考えることができる。

【思考・判断・表現】

- 焼き物に興味を持ち、福住のお茶を楽しく飲むことができる作品を作ろうとする。

【主体的に学習に取り組む態度】

3. 単元について

(1) 教材観

福住校区では、昔から地域の粘土を使い焼き物を製作していた時期があった。しかし、時代の流れにより、現在では、ほとんど行われていない。そこで、本校では、地域に根差した学習(福住学)と関連させ地域で採取した粘土を使い、陶芸活動を行う。また、自分で焼いた焼き物を使って福住校区で取れた新茶を飲む体験を行う。それにより地域を大切にする気持ちを育むことができる。

焼き物をつくる方法として、手びねりや玉づくり、ひもづくりを知り、粘土の特性を生かして様々な表現を試み、児童一人ひとりの思いや発想を生かし、身のまわりの使える物をつくる活動を行う。児童は、自分の思いや意図を伝えるものを構想し、粘土の感触を大切にしながら制作できるようにする。また、練り、成形していく中で形やデザインなどさらに発想を広げ、造形感覚を働かせて表現できるようにする。ここでは、成形の方法として、手びねりや玉づくり、ひもづくりといった技法を学び、それぞれの用途に合った方法を選び製作する。

(2) 児童観

本校の児童の多くは、時間をかけてじっくりと活動を行い繊細な表現を好む児童が多く見られる。児童はこれまで、低学年では油粘土、中学年では紙粘土を材料として制作した経験はある。しかし、陶芸用の土粘土を使っての活動は初めてである。そのため、道具の使い方や、焼き物のつくり方について、基礎的なことがらを学習した上で、焼き物の表現を工夫できるようにする。

そこで、単元を展開するに当たり、焼き物が身近で使われていることに気付かせ、視聴覚教材等の資料を通して焼き物を身近なものとして感じられるようにする。また、焼き物の歴史と高い技術を継承しつつ、新たな物づくりに取り組む様子を、校区探検やインタビュー、陶芸家の話などから理解できるようにする。

(3) 指導観

本題材の福住地区で採取された土粘土を使用する。身近にある自然の素材である土を成形し、焼成す

る過程を通して五感を働かせながら活動できるようにする。また、身体感覚を磨き、地元で取れた粘土を使って陶芸活動を行う学習に取り組むことで豊かな感性や創造性の育みをめざす。身近にある自然の素材である土(粘土)をまるめたり、つぶしたり、のぼしたり、たたいたりする土との対話の中から、素朴な温かみをもった土の魅力を肌で感じとれるようにする。

導入の場面では、福住校区の山を削った断層から土粘土の層を実際に見学できるようにする。また、視聴覚教材を活用し陶芸について鑑賞することで、地域ごとに様々な形や色、工程の違いなどに気付けるようにする。成形の場面では、「新茶を飲むにはどのような形がよいのか」という課題の解決に向けて各自が創造力を働かせ、試行錯誤しながら自分のイメージする作品へ近づこうとねばり強く取り組む活動を展開できるようにしたい。

また、イメージがつきにくい児童に対しては視聴覚教材を用いて画像提供してあるコンテンツを活用したり、グループ活動による助け合い活動や教師による支援の場や方法の工夫を行ったりすることで支援していく。

焼成の場面では、素焼き、釉がけ、本焼きといった一連の制作過程を体験し、一人ひとりの児童が焼き物の美しさに触れ、粘土が陶器へ変化する楽しさを味わうことができるようにする。そして、時間をかけて作り上げることで、作品を大切にしようとする態度を育てる。

(4) ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点(見方・考え方)

- ・多様性…多様な人々が共に陶芸活動を行うことで、それぞれの個性や才能を認め合い、尊重し合うことができる。また、作品を通して互いの文化や価値観を理解し、共生社会の実現に向けた意識を育むことができる。
- ・有限性…陶芸活動を通して、資源の有限性や大切さを学ぶことができる。また、作品の制作過程で出る端材を再利用したり、古くなった作品を砕いて新しい作品の材料にしたりすることで、リサイクルの概念を実践的に学ぶことができる。

・本学習で育てたいESDの資質・能力

- ・未来像を予測して計画を立てる力

土をこね、形を作り、釉薬をかけ、窯で焼き上げるという一連の工程を通して、完成形をイメージし、計画的に進めていく必要がある。その過程を通して、様々なことを予測し、計画を立て、実行していく力を養うことができる。

・本学習で変容を促すESDの価値観

- ・自然環境、生態系の保全を重視する(生物多様性の重視)

ESDの視点を取り入れることで、自然環境や生態系の保全に貢献することができる。また、陶芸に携わる人々が、ESDの重要性を理解し、持続可能な社会の実現に向けて行動することが期待できる。

- ・幸福感に敏感になる。幸福感を重視する。

土を触り、形を作り、焼き上げるというプロセスを通して、創造性や自己表現の喜びを味わ

える活動である。また、完成した作品を手にする事で達成感や満足感を得ることができる。

・達成が期待されるSDGs

目標 9…インフラ

目標 12…生産と消費

目標 15…陸上資源

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
<p>① 目的や使い方に合わせてまるめたり、つぶしたり、のぼしたり、たたいたりの技法を使って、粘土の特徴を生かした作り方を工夫している。</p>	<p>① 手びねりや玉づくり、ひもづくりを知り、粘土の特性を生かして自分なりの考えを発想しようとしている。</p> <p>② 視聴覚教材を参考しながら新しい形を発想できる。</p>	<p>① 地域に根ざした焼き物や手づくりのよさに興味をもっている。</p> <p>② 焼き物作りに意欲的に取り組もうとしている。</p>

5. 単元の指導計画（全6時間）

次	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（△） 備考（・）
1	<p>学習内容の把握</p> <p>○福住地区で取れる新茶を自分で作った焼き物を使って飲むことを知る。 福住地区の山の断面を見学し良質な土がとれることを知る。</p> <p>粘土や用具に触れる</p> <p>○焼き物用粘土を使って、様々な技法や用具を使ってつくることを知る。</p> <p>○焼き物用粘土と用具を実際に使い、粘土の特徴を感じ取る。</p>	<p>・新茶を飲むには、どのような形の焼き物が良いのかを考えられるようにする。</p> <p>・様々な技法や実際の用具の紹介をし、制作方法のイメージが湧くようにする。</p> <p>・焼き物用粘土と用具に触れ、粘土の特徴を感じ取り、作品の構想につなげられるようにする。</p>	<p>△ウ1 △イ1・2</p>

	<p>○まるめたり、つぶしたり、のぼしたり、たたいたりの技法を試す。</p> <p>※粘土が乾かないようにぬれ雑巾とビニル袋で水分を保持する。</p>	<p>・まるめたり、つぶしたり、のぼしたり、たたいたりの技法を演示し、技法のポイントを知らせる。</p>	
2	<p>制作する</p> <p>○基本の形を作る</p> <p>・まるめたり、つぶしたり、のぼしたり、たたいたりの技法を生かしてつくる。</p> <p>・粘土に触れる左右の手の形や力の強弱に注意しながら制作する。</p> <p>素焼き、釉薬、本焼き</p> <p>○素焼き</p> <p>1週間から2週間乾燥させ700度から800度の温度で焼く。</p> <p>○釉薬をつける</p> <p>色見本をもとに自分が好きな色を選び、釉薬をつける。</p> <p>○本焼き</p> <p>1200度から1300度の高温で焼く</p>	<p>・手びねりや玉づくり、ひもづくりの技法を使い、底から水などが漏れないようにする。</p> <p>・粘土が乾かないように濡れタオルやどべを使って接着できるようにする。</p> <p>・釉薬をつける時は、焼き物の底面には付かないようにする。</p> <p>・釉薬が底面に付いていないことを確認する。</p>	<p>△ア1</p> <p>△イ1</p>
3	<p>鑑賞をして新茶を楽しむ</p> <p>焼き上がった自他の作品の手触りや色などを味わう。</p> <p>自分の作品を使い福住の新茶を楽しむ。</p>	<p>・自他の作品を鑑賞する。</p> <p>・自分の見てほしい点や友達の良い点などをワークシートにまとめる。</p> <p>・自分の作った焼き物で新茶を楽しむ。</p>	<p>ウ1・2</p>